

生きる力を育てる物語の授業

講義 西郷竹彦

二〇〇一年一月
文芸研 編集

生きる力を育てる物語の授業

講義 西郷竹彦

二〇〇一年一月十二日 五所川原市中央公民館

国語の授業、特に物語教材を、生きる力・生き方ということにつなげてお話ししたいと思います。順序としては、最初に「スイミー」を取り上げて、その次に「わにのおじいさんのたからもの」。この二つは教科書教材ですが、最後に教科書にはありませんが、私が訳した、ピアンキという人の「ずるいきつねとかしこい子がも」をやってみたいと思います。

先生方が授業なさるのに少しでも参考になるように、このテーマに直接は関係ありませんが、せっかくの機会ですから、文芸作品を読むときに必要な理論ということも、小出しにちょっとお話ししながら、このテーマに迫っていきたいと思います。

「スイミー」

かいつまんで読みながら、要所要所説明をしていくようにしたいと思います。

△ 広い 海の どこかに、小さな 魚の 兄弟たちが、楽しく くらして いた。

みんな 赤いのに、一ぴきだけは、からす貝よりも まっ黒。およぐのは、だれよりも はやかった。▽

程度を表すたとえ（比喻）

この△からす貝よりもまっ黒▽というのは、たとえですけれども、たとえには、様子をたとえるたとえと、程度をたとえるたとえと、二通りあるんですね。（板書）

たとえ
①様子をたとえる △のよう △みたいに
②程度をたとえる △よりも △ほど

様子を何かをもってきてたとえる。それから程度は△よりもとか、△ほどとか、△くらいか、△こういうことばがつかます。△からす貝よりもまっ黒▽というのは、からす貝のように黒いと言っているのではなくて、からす貝の黒さよりももっと、ずっと黒いというように、黒さの程度を表している。もちろん黒いという様子も含んでいます。黒さの程度を表す。これが程度を表すたとえです。あ、からす貝よりもずっとずっと黒いんだな、とね。

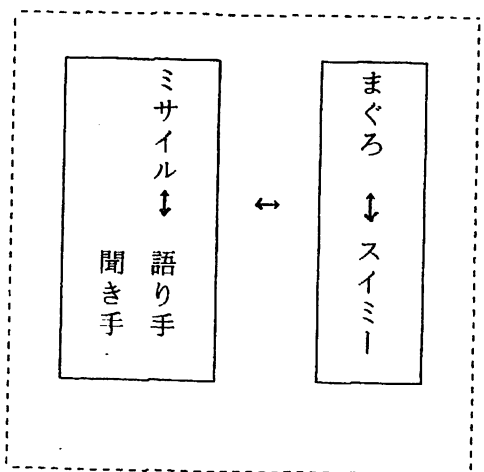
この黒いというのはスイミーの特徴の一つですね。実はここにさりげなくへからす貝のようにまっ黒Vとありますけれど、この黒いということが、物語の一番終わりの方で、意味を持ってきます。それは先へ行きましてから。

へ名前はスイミー。Vと体言止めになっていますが、歯切れのいい、くっと切る切り方。普通子どもの童話というのは、日本語に訳すときに、たいてい敬体(です。ます。)に訳すのが普通ですが、この作品では谷川俊太郎さんは、常体(である。)で訳しています。これは非常に歯切れのいい、この作品の内容とマッチした訳し方だと思います。

様子を表すたとえ

へ ある 日、おそろしい まぐるが、おなかを すかせて、すごい はやさで ミサイ
ルみたいにつっこんで きた。V

このへミサイルみたいにV、これが様子を表す比喻です。こっちの方はくみたい、くのようにという言い方がされます。そこで大事なことは、このお話を語っている人、語り手といえます。それから人物のスイミーですが、このスイミーはミサイルというものを知らないんですよ。人間ではありませんからね。するとこのたとえはどういうたとえかという
と、このスイミーにとってのまぐるはどういうまぐるなのか、という関係を、語り手、聞き手である読者(子どもですよね)とミサイルの関係でたとえる。たとえというのはこういうものなんです。関係を関係で関連づけることをたとえと言います。(板書)



どうということかという、語り手はミサイルというものを知っていますね。子どもももちろんミサイルというものを知っている。スイミーは知りませんよ。で、このミサイルのようにというのは、スイミーがミサイルのように思ったわけではない。スイミーたちにとってまぐるというのは、スイミーたちの生活・平和を根絶やしにする非常におそろしい存在である。そういうスイミーたちとまぐるとの関係は、たとえばみると、私たち語り手・聞き手・子どもにとって、ミサイルというのはどういふものか、ミサイルというのは幻の

武器ですね。そういうおそろしい、ちょうどこの関係に等しいと。これがたとえというもののなんですか。

普通は、ミサイルとまぐろをすぐ結びつけてしまいますが、こういう結びつけ方は理論的に正しくない。スイミー（人物）にとってのまぐろはどのような存在かというと、私たちにとってのミサイルのようなものだ、とたとえている。これがたとえというもののなんですか。ここをまちがえないように。

たとえとは、直接結びつけてはいけない。今のようである関係を、別な関係でたとえる、つまり関連づける、ということですか。

△ 一口で、まぐろは、小さな 赤い 魚たちを、一びきのこらず のみこんだ。
にげたのは スイミーだけ。▽

こういう恐ろしい存在が、言ってみれば、読み手語り手の私たちにとって、ミサイルのようなものである、と語っているわけです。

△ スイミーは およいだ、くらい 海の そこを。こわかった。さびしかった。とても かなしかった。▽

これは変化を伴う反復と言います。

△ けれど、海には、すばらしい ものが いっぱい あった。おもしろい ものを見
るたびに、スイミーは、だんだん 元気を とりもどした。▽

とありますが、どういうすばらしいものがあるのか、どういうおもしろいものがあるのか、具体的に並べられてきます。つまり、ここに書かれてあることの具体例が、このあとに出てくる。さっそくたとえが出てきました。

関係を関係で関連づける

△ にじ色の ゼリーのよう な くらげ。▽ もちろん、スイミーはゼリーなんて知りません。△ 水中ブルドーザーみたいな いせえび。▽ スイミーが水中ブルドーザーみたいと思
ったわけではない。ではこのたとえはどういうたとえかというところ、語り手および聞き手、子どもは、水中ブルドーザーというものを知っています。そうすると、このスイミーが見ているいせえびというのは、どういうふうに見えるかというと、私たちから見る水中ブルドーザーみたいなものである。とこういうことなんです。

あるとき子どもが質問しまして、「先生、スイミーってのは魚なのに、この水中ブルド

「ザーとか知ってるの？」って。そしたら先生困ってしまいました、立ち往生してましたね。そりゃあそうですよね。知ってるとは言えないでしょう。そこなんです。こういう理論を知っていたら、「それはね、スイミーはいせえびのことは知ってるけど、水中ブルドーザーなんて知りません。語り手、聞き手である私たちから見た水中ブルドーザー、そういうものがスイミーから見たいせえびだよ。それが私たちから見ると水中ブルドーザーみたいなんだ」とね。それがたとえてものです。あ、おもしろい、となるわけです。それからへくらげVでいうと、普通刺されるとか痛いとか、とかくそういうイメージの方が強いですけども、スイミーにとってはここでは、それが美しいというイメージです。へざりVというのと、わたしたちは甘い・おいしいという、ちょうどそういう感じにスイミーからは見える、ということですよ。

さて、いろいろ出てきまして、次にうなぎというものが出てきますね。

へうなぎ。顔を 見る ころには、しっぽを わずれて いるほど 長い。V
へうほど長い。Vこれは程度を表すたとえです。顔を見るころにはしっぽを忘れてる。それほど、それくらい長い。

たとえに用いるもの

たとえがいろいろ出てきました。全部見ていくと、次に、へ風に ゆれる もも色の やしの 木みたいなの いそぎんちゃく。Vというのもありますね。このやしの木というのは海の中にはありませんから、スイミーがこんなの知ってるわけありませんね。もちろん、語り手・聞き手・子どもにとって、やしの木はみんな知っていることです。語り手はどういうものをたとえにするかというのと、聞き手の知っているものを持つてきたとえる。スイミーが知っているものを持つてきたとえる。スイミーは知らない。要するに、語り手はどういうものを持つてきて、聞き手にわからせるかですからね。やしの木ってのは、子どもは知っている。だからへやしの木みたいなの。つまりそれは、スイミーがいそぎんちゃくのことをどう見ているかというのと、風にゆれるもも色のやしの木みたいなの、と私たちが感ずるような感じ方と似ているということですよ。

表現の本質

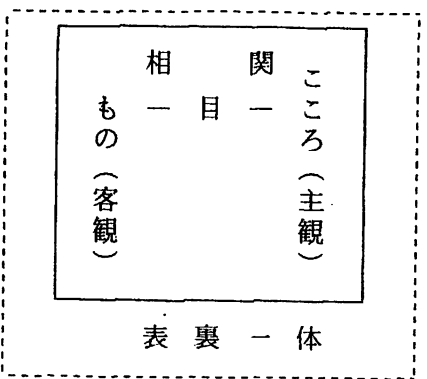
そもそもいそぎんちゃくというのは、小さな魚にとって天敵です。いそぎんちゃくにうっかり触れようものなら、小さい魚は食われてしまうわけです。おそろしいものなんです。なんで、ここでスイミーは、おそろしい・こわいイメージのくらげとならなかったのか。初めて見たわけではないですよ。ここに出ているものは、普段スイミーは見て知っているものなんです。

でも、今現在のスイミーは、もうひとりぼっちになってしまって、世界が暗くて、こわ

くて、さびしい、孤独な、悲しい。そういう状況の中でのスイミーから見ると、今はまるでいそぎんちゃくも、風にゆれるもも色のやしの木みたいなの、おもしろい、うつくしいものに見えるということなんです。

ということつまり、今、現在のこういう状況にあるスイミーの心を表現しているんです。ここが大事なところです。表現の本質です。たとえにしても何にしても、表現は人物の心を表現している。

みなさんは、いそぎんちゃくならいそぎんちゃくの様子を、このたとえば表していると思うでしょう。やしの木みたいなのは、このいそぎんちゃくというものを表していると思うでしょう。これはまちがいですね。(板書)



ものを表しているんじゃないくて、そのものをスイミーがどういうふうに見ているかという、ものと心を表裏一体に表現している。心は主観、ものは客観ですね。客観的な表現ではなくて、現在のスイミーの目と心が主観、この主観がとらえた客観、つまり、ものというわけです。

スイミーにとっては、いつでもへ風にゆれるもも色のやしの木Vと感じられるわけではない。孤独なひとりぼっちになった現在の目と心が、そういうふうに見てる。ですから、ものを表現していると思っではいけませんよ。すべて表現というのは、心を表現している。これを、だれが、どう見たか、という丸ごとの表裏一体の表現。みなさん読解指導でよく、ここは様子を書いている、ここは気持ちを書いている、それは大変なまちがいです。様子と気持ちっていうのは、二つに分けることのできないものなんです。すべての認識表現は、だれが・何を・どう・見たか、ということの表現なんです。

だれがという主観があって、その主観と客観を表裏一体に表しているんです。すべてです。たとえばもちろんのこと。すべて言葉は、声喩でも何でも、全部そうです。

さっき黒板を叩いて、「バン」とか「バシッ」とか言いましたね。この認識表現・言葉これは何を表しているのかというと、客観と、それをだれがどう感じたかという瞬間を一体にしたものが、「バン」とか「バシッ」とか。あの言葉・表現は、音を客観的に表したのではなくて、その音を感じてどう表現したかということです。すべてそうですよ。

というようなことを、国語の授業では教えてほしい。言葉の本質・表現の本質、そのあとで、人間というものの本質・人間というものの真実というところに迫って行くわけです。へも色のいそぎんちゃく、この比喩はいつでもスイミーがこう思っているわけではない。普段はスイミーはいそぎんちゃくを意識しなかったかも知れないし、意識するとすれば、「あ、なんかこわいものが動く。」「さわったら大変。」と思っていたかもしれない。しかし今は、ひとりぼっちになった現在の状況の中で、スイミーにとっては、見るもの聞くものすべてを、非常に新鮮な驚き・感動をもって受け止める。

末期の眼

芥川龍之介が、「末期の眼」という言葉を使いました。それを川端康成がノーベル賞をもらったときに、そのときの演説の中で使いました。「作家たるものは、末期の眼で、自己と自己を取り巻く世界を見なさい」ということです。

どういうことかというところ、人間ていうものは、普段見ているときは、ぼやっとして見ている。だらーっと精神もたるんで見ている。ものをちゃんと見ていない。でも、おまえは明日もう死ぬんだ、と死の宣告をされたと仮にします。つまり「末期の眼」です。そうすると、ものが今までとは違ったように見えてくる。鮮やかなものに見えてくる。そういう眼でものを見なさい、人間を見なさい、それを作家の心得として「末期の眼」と芥川が言い、さらに川端が話したわけです。

結局、この海の底の様子は、末期の眼に近いようなスイミーの目で見た世界なんです。ここにあるものは初めて見たわけではなく、いつも見ている。でもこういう目では見えない。明らかに、さびしい・こわい・悲しい・ひとりぼっち・孤独になった、そういうギリギリの状況に置かれた目と心がとらえた海の世界の姿なんです。そういうふうに見えるほほしいですね。

だから裏返すと、これは全部スイミーの心が語られている。スイミーが見ている様子を語るということは、裏返して言うそれは、なぜスイミーがそのように見ているかという心が語られている。

海にはすばらしいものがいっぱいあった、おもしろいものがいっぱいあった、というのは、いつもそういうふうに見えるわけではない。今そういう状況だからこそ、そういうふうに見えるわけです。

そのときにたまたま、そっくりの小さい魚の兄弟を見た。

みんな生きる

へ「出て こいよ。みんなであそぼう。おもしろいものがいっぱいだよ。」

さっき見た世界ですね。それをみんなに言うわけです。ところがみんなは、そんな外へ出たら、大きな魚に食べられてしまうからだめだ、こわいと。そこでスイミーは言うわけです。

△「だけど、いつまでも そこに じっと して いる わけには いかないよ。なんとか 考えなくちゃ。」▽

こわいから、大変だから、じっとどっかの隅っこに縮こまって生きていく、そういう生き方をスイミーは否定するわけです。そんな生き方はつまらん、そんな生き方をしないで一緒に生きようと。しかし、ただ外に出たのでは、またまぐろにおそわれて、全滅しないとも限りませんからね。ただ外へ出るということではだめですよ。そこで、

△ スイミーは 考えた。いろいろ 考えた。うんと 考えた。▽

△いろいろ▽は幅広く、△うんと▽は深く。それで、

△「そうだ。みんな いっしょに およぐんだ。海で いちばん 大きな 魚の ふりを して。」▽

とスイミーは教えたんですね。

ここで何をスイミーが思いついたかは語られていませんね。これを仕掛けといいます。ここで読者はね「あれ、何をいったか思いついたんだろう。」と思う。そのことを語り手はわざと伏せてある。読者の興味を誘って、そのあとへ期待をかけると。そういうふうに仕掛けているわけです。何のためにこういうことをするんだろうと、読者は疑問を抱きましますよ。

△けっして、はなればなれに ならない こと。みんな、もち場を まもる こと。▽

持ち場を守るといふのは、役割分担をするということですよ。

△ みんなが、一ぴきの 大きな 魚みたいに およげるようになった とき、スイミーは 言った。

「ぼくが、目になろう。」

朝の つめたい 水の 中を、昼の かがやく 光の 中を、みんなは およぎ、大きな 魚を おい出した。▽

自分の役割

大きな魚の形にみんなになりました。そこで△目になろう▽。これを中には、スイミーが威張っていると言っている人がいますが、威張っているんじゃないですね。それはなぜかというと、魚の中で黒い所って言うのは目ですよ。スイミーが目になろうっていうのは、俺がえらいからではなくて、自分は辛い黒い。その黒さということを生かすならば、ここが自分の役割分担する所なんだ、ということ目になろうと言っているのであって、そこを誤解してはいけません。威張って言うてるんじゃない、ぼくは黒いから目になるよ、ということとして言っているわけです。

△もち場をまもる▽とスイミーは言ってますが、自分でできること、自分の条件を生かすと言っているわけです。そうして、みんなを力合わせて、△大きな魚を追い出した▽こういう話であるわけです。

対比することで見えてきた本当の平和

初めの場面の平和な場面がありました。△楽しく くらして いた▽とありますから、平和な楽しい生活があったわけです。

今また、平和な楽しい生活になりました。一見、前と後は同じように見えますけれど、本質的に違う。前のは見せかけの平和。見せかけの平和ってのは、たちまちつぶれ去ってしまう平和です。なぜかという、それは単なる群れに過ぎなかった。自覚して組織された集団ではない。それぞれが持ち場を守って、役割分担をして、一致協力して組織された集団となっているものではないわけです。

本当の平和というのは、そういうものに保障される。そうでない限りは見せかけの平和ではない。結局まぐろがやってくると、一挙に費やしてしまう、そういうはかないものだということが、前と後を比べて、対比して、見えてくる。

比べることで見えてくる。そうして、あ、なるほど。本当の幸せ、本当の平和というのは、自分たちが一人ではなくて、みんなで役割分担をして持ち場を守って、団結して暮らすということだな、ということ認識する。そこから、一人の人間としての生き方というものが決まってくるわけです。

生きる力とは

生き方というのは一人で勝手に考えて決まるわけではない。集団の中での、集団と個の関係ということをしっかりと認識することで、自分の生き方も決まってくる。そして、生きる勇気も、みんなと一緒に平和を守って生きていけるという、そういう自信も持つことが出来るわけです。

自信なきところに力なんかがあるわけではありません。自信があつてこそ、力が発揮さ

れる。自信なくして、目的なくして、力なんてものは出てきません。

スイミーもまた、初めと終わり違う。見た目は同じですけど。初めのスイミーは、ただ群れの中で、個として遊び回っていただけです。ああいう大変なことを経験して、改めて世界というのはどういうものか、ということを経験して、改めてまたみんなと一緒に集団を組織して、初めて自分たちみんなの生活を守る。みんなの生活が守られている中で、自分の生活も保障される、ということを経験したわけです。そこから生き方というものが決まり、生きる力も出てくる。そういうふうには理解してほしいと思います。

何回も言いますが、生きる力というのは、どこから湧いてくるものではないんですね。生き方ということをしつかりと学んで、学ぶというのは、一人で生きるという生き方ではなくて、みんなと共に、みんなの中で自分というものを発揮するという生き方を学ぶ。そこから生き方がはっきりする、生きる力も出てくる、自信も出てくる、希望も出てくる、こういうことです。

文芸研の考え方

「スイミー」を私どもが授業するとすれば、こういうことを考えた授業にする。

まず言葉の本質・表現の本質、例えばいっばい出てきたたとえというもので、たとえばどういうものを指導しながら、同時にスイミーがひとりぼっちになったことで、世界がいかにすばらしいかということを経験した。このすばらしい世界を生きるためには、みんなと一緒にでなければ、自分の生活も幸せもない、ということを経験した。というふうに、言葉の問題が思想の問題になっていく。こういう授業でなくちゃいけない。

言葉は言葉、というふうに切り離さないで、言葉を攻めていくことがそのまま、その作品のテーマ（思想）に生き方につながっていく。こういう考え方は。

「わにのおじいさんのたからもの」

この教材は教科書にも載っていますね。これを授業された方、ちょっと手を挙げて下さい。あ、だいぶおられますね。どんな授業をされたのかということはありませんが。（笑）私の話を聞いて、あ、私はちゃんとやってたとか、いろいろ思いながら聞いて下さい。まだの方はこれからこの学年をもって授業されることもあるでしょうし、もたなくても、文芸作品の読み方、つまり人間という生き方・生き方のわかり方、そういう点では学年を越えて大事な問題ですから、そういう気持ちで一つ、お聞き下さい。

作者

これは川崎洋さんという詩人ですが、この方はもともと大人の詩を書く方ですけれども、子どもの詩に大変興味があって、いろいろな形で子どもの詩を取り上げて、新聞に書いた一冊の本にまとめたりしておられます。そういう意味では、私たちに近い立場にいる詩人です。まど・みちおさん、原田直友さん、工藤直子さんもそうですけれども、川崎さんというのは、ちょっと毛色のちがう、そういうもともと大人の詩を今ももちろん、書いておられるんです。

これは童話ですが、川崎さんは童話も二・三書いておられるんです。なかなかおもしろい、詩人のひらめきのある作品だなあというものを書いておられます。

△へびもかえるも、土の中にもぐりました。からすが、さむそうに鳴いています。▽

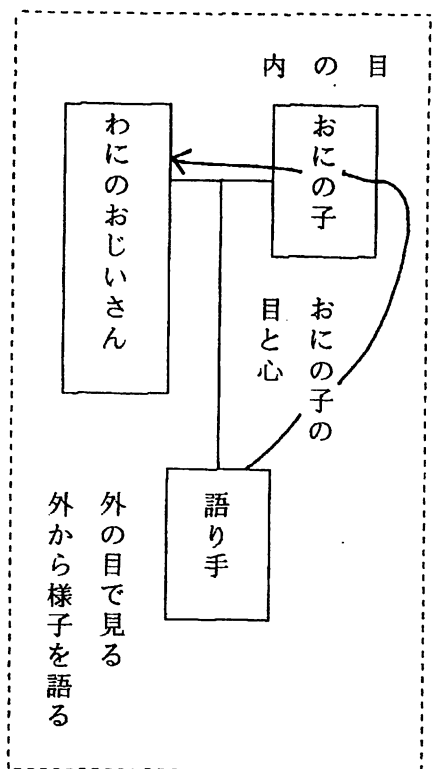
季節感がみごとにばっと出てますね。

△ある、天気の良い日に、ぼうしをかぶったおにの子は、川ぎしを歩いていて、水ぎわでねむっているわにに出会いました。

わにを見るのは生まれてはじめてなので、おにの子は、そばにしゃがんで、しげしげとながめました。▽

内の目・外の目

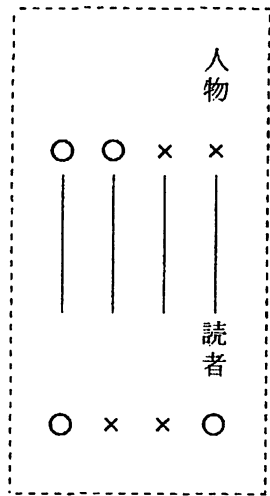
文芸作品を読むときに、こういう問題が一つあるんですよ。作品というのは、語り手が語っているわけですが、語り手が外の目で、外から様子を見る。しかし同時に語り手はおにの子の目と心に寄り添って、おにの子の側からわにのおじいさんを見る。こういうふうに語っている語り方があります。これを内の目で見ると、という言い方をします。外からだけ見て語っているのは、外の目で見るといいます。(板書)



語り手が外の目でおにの子の様子を語り、またわにのおじいさんの様子を語る。それが語り手がおにの子の目と心になって、おにの子の側からわにを見るように語る。内の目と外の目が二重に重なっている。ここが文芸作品というものの、独特な語り方なんです。こういうことを踏まえながら授業していくわけですが、もう一つ大事な問題があります。

人物と読者の関係

おにの子はわにというものが何かをしらない、この場合、人物は知らない・読者は知っているという関係があります。(板書)



四通りあるわけです。作品というのはどんな作品でも、こういう人物と読者の関係で四つのタイプがあります。つまり、ここでまず押さえておかなければならないことは、語り手がおにの子の方に寄り添って語っているんだということをひとつ押さえておく。もう一つは、おにの子はわにというものを知らない、だからものということも知らない。人物は知らない・読者は知っているという関係が作品にある。それを踏まえて考えるということになる。

△しげしげとながめました▽はなんとなく、読者から見るとほほえましい感じがです。

△ そうとう年をとって、はなの頭からしっぽの先まで、しわしわくちゃくちゃです。

人間で言えば、百三十才くらいのかんじ。

わには、ぜんぜんうごきません。しんでいるのかもしれない——とおにの子は思いました。▽

なんて、語り手はおにの子に寄り添って語っているからです。

△ わには目をつぶり、じっとしたまま。▽

わにの様子は語られても、わにの気持ちは一言も出てこない。この作品の中に。

△ おじいさんでなくて、おばあさんなのかもしれない——と思いました。▽

やっぱり、おにの子の気持ちはずっと出てきますね。語り手がおにの子に寄り添った表現のあり方なんですネ。

△「わにのおばあさん。」

やっぱり、わにはびくりとも動きません。▽

というのは、わにの様子。わにの様子とはおにの子の目から見えたわにの様子ということです。

△ しんだんだ——とおにの子は思いました。▽

ずっとおにの子のところには、△思いました▽という言葉がくっついてきます。でも、わにのおじいさんの方では、一言も△思いました▽とは出てきません。なぜかというところ、さっき言ったように、語り手がおにの子の側から語っているからです。

さてそこで、

△ おにの子は、そのあたりの野山を歩いて、地面におちている、ほおの木の大きなはっぱをひろっては、わにのところにはこび、体のまわりにつみあげていきました。

朝だったのが昼になり、やがて夕方近くなって、わにの体は、半分ほど、ほおの木のはっぱでうまりました。すると、

「ああ、いい気もちだ。」

と、わには、つぶやきながら目をあけたのです。▽

ずいぶん熱心にやっていますね。わにがいい気もちといっているということは、気もちよくなるようなかぶせ方をしていたということです。ていねいに心をこめてはっぱをかぶせたということを裏付けている。

△「君かい、はっぱをこんなにたくさんかけてくれたのは。」

「ぼくは、あなたがじっとしてうごかないから、しんでおいでかと思ったのです。」▽

なかなか丁寧な言い方をしていますね。今時こんな言葉遣いのできる子どもはいまませんね。これはそういう子どもを育てていないということですね。みなさんがね。(笑)大変いい教材ですね、教師にとって。きちっとこういう言い方をしている。えらいですね。

△「遠いところから、長い長いたびをしてきたものだから、すっかりつかれてしまってね、もう、ここまですれば安心だと思ったら、きゅうにねむくなってしまっさ。ずいぶん何時間もねむっていたらしいな。ゆめを九つも見たんだから。」

そう言うと、わには、むああっ長い口をいっぱいあけて、あくびをしました。

「あの、わにおじいさん？それとも、おばあさんですか？」

「わしは、おじいさんだよ。」

「わにおじいさんは、どうして、長い長いたびをして、ここまでおいでになったのですか？」▽

この聞き方もきちんとしていますね。いい教材ですね。こういう所、子どもに思い知らせて。「どうだ、このおにの子、ちゃんといいねいな目上の人に対する言い方をしているね。」とね。

△「わしをころして、わしのたからものをとろうとするやつがいるのでね、にげてきたってわけさ。」

おにの子は、たからものというものが、どんなものなのか知りません。たからものということばさえ知りません。▽

もちろん読者は知っています。こういう違い、そこがなんとなく、読者の子どもは優越感とどうか、優位な立場で、ちょっと年下の子どもをみるような形で見ていく。ですから、くすくす笑いながら、軽蔑じゃないですよ、ちょっとほほえましく見る、という態度で読んでいく。

△ とんとむかしの、そのまたむかし、ももたろうがおにからたからものをそっくりもってしまってからというものは、おには、たからものとはぜんぜんえんがないのです。▽

この辺は日本の子どもを読者として頭に置いて作者は書いています。だからももたろうの話を持ち出している。

△「きみは、たからものというものを知らないのかい？」

わにおじいさんは、おどろいて、すっとんきょうな声を出しました。

そして、しばらくまじまじと、おにの子の顔を見ていましたが、やがて、そのしわしわくちやくちやの顔で、にこっとしました。

「きみに、わしのたからものをあげよう。うん、そうしよう。これで、わしも心おきなくあのよへ行ける。」▽

私も今ちょっとこういう心境にあるんです。(笑)ここでちゃんとみなさんに、私の持っているたからものを差し上げて、そしてあの世へ行こうかな、とっておりますけれど。

△ わにのおじいさんのせなかのしわが、じつは、たからものかくし場所をしるした地図になっていたのです。

わにのおじいさんに言われて、おにの子は、おじいさんのせなかのしわ地図を、しわのない紙に書きうつしました。

「では、行っておいで。わしは、このはっぱのふとんでもうひとねむりする。たからものってどういふものか、きみの目でたしかめるといい。」

そう言って、わにのおじいさんは目をつぶりました。▽

ここで読者も、どんなたからものだろうということが、やはり興味・関心になってくるわけですね。これは仕掛けですね。読者もまた見てみたいわけです。わにのおじいさんのたからものってどんなものだろう、だいたいそのたからものに行き着くかどうか、探し出せるかどうか、興味・関心の一つですね。

△ おにの子は、地図を見ながら、とうげをこえ、けもの道をよこぎり、つりばしをわたり、谷川にそって上り、岩あなをくぐりぬけ、森の中で何度も道にまようそうになりながら、やっと地図の×しるしの場所へたどりつきました。▽

ここまで来るということ自体が大変ですね。このおにの子はやはり、わにのおじいさんにも言われたし、何とかそれを果たそう、それからたからものってどういうものか、わにのおじいさんはくれるって言うけど、それはいったいどういうものをくれるのか、そういうものがあって、一生懸命ここまで来たわけです。

△ そこは、きりたつようながけの上の岩場でした。

そこに立った時、おにの子は目をまるくしました。□で言えないほど美しい夕やけがいったいに広がっていたのです。

思わず、おにの子はぼうしをとりました。

これがたからものなのだ——と、おにの子はうなずきました。

ここは、せかいじゅうでいちばんすてきな夕やけが見られる場所なんだ—— 思い
ました。▽

つまりおにの子は、これがあのおじいさんの言ったたからものだと思ったわけですね。そのたからものに出会って、感動しているわけですね。

さて、ここで話が終わっているわけじゃないですね。

△ その立っている足もとに、たからものを入れたはこがうまっているのを、おにの子は知りません。

おにの子は、いつまでも夕やけを見ていました。▽

と、語り手が読者に語っている。△おにの子は知りません▽ということは、人物は知らない、しかしあなたは知っているんですよ、と言っているのです。

そうすると、ここで、おにの子に何を言ってあげたいか、というようなことをたずねてみたりします。すると子どもは口々にいろいろ言うだろうと思いますね。「おにの子よ、君の言っている夕やけもすばらしいかもしれないが、きみのすぐ足下に、おじいさんの言ったたからものがあるんだよ」と例えばこう教えてあげたいというかもしれませんね。

いろいろ授業のしかたはあると思います。私はまだこれを授業したことがないんです。大抵のものは授業して、最低五・六回やったり、中には十回くらい授業したりします。それは学年をちょっと上げてみたり、あるいは町の子、村の子、いろいろ。それから授業のねらいや手だてをかえたり、いろいろ試みて実験授業をし、なるほど、こういうときはこうなんだな、と自分が教壇に立つことで、経験を通して、自分の理論というものを確かめてみたいとやっているわけです。

これはまだ授業したことがないのですが、もし私が授業するとしたら、最後の場面からどういうことをしようかな、と思います。

たからものの意味・価値

まず、たからものというものの意味・価値を考えさせたいと思います。

おじいさんにとってのたからものということは何でしょう。世間で、私たちが言う、常識的な意味でのたからものですね。だれもがだいたい考えているような、そういう意味でのたからもの。昔話で言えば、金・銀・珊瑚・綾・錦というように出てくるたからものですね。これがわにのおじいさんの言うたからもの。

ではおにの子がたからものと思ったのは、あの美しい夕やけ。あれがおにの子にとってのたからものということになるんでしょうね。

すると、意味・価値とはどういうものか。(板書)

○○にとっての	意味
○○としての	価値

つまり、意味とか価値とかは、客観的な唯一絶対の価値というものがあるわけではない。「だれにとって」ということをはっきり押さえておかなくてはならない。例えば、今私が

古ぼけた、こわれかけた万年筆を持っているとします。こんなもの、みなさんから見ると一文の価値もない。もらってもまったく意味がない。しかし、私にとっては、例えば亡き父の形見としての意味・価値があるということになる。ある人にとっては、何の意味も価値もない。しかし、私にとっては父の形見としての意味・価値があるとなる。意味・価値とはそういうものです。

もちろん、たからものというのは価値ですよね。わにのおじいさんにとってのたからものというのは何か。これは常識的な世間一般の人が同じように価値とと思っているようなたからものだと思います。でもそういうたからものは、人に奪われる、盗まれる、落としてなくすということがある。現にこのわにのおじいさんのたからものを、悪い人々がねらっていますね。そのために命をねらわれるという経緯があります。それがわにのおじいさんのたからもの。私たちが常識的に考えているたからものが、そういうたからものなわけです。

ですけど、おにの子にとってのたからものは夕やけです。夕やけというのは、美しいものとしての価値・美しいものとしての意味、それがおにの子にとってのたからものです。さっきと違いますね。

読者から見るたからもの

さて、読者である私は、そういうおにの子を見て、こういうふうに思うんですよ。

「おにの子よ、君が見ている夕やけのすばらしさ、それは君にとって確かにたからもの、すばらしいものである。しかし、私（読者である私）は、君を見ていると、君のそういう美しいものに感動する心こそが、君にとってのすばらしいたからものじゃないかと思うよ。」

と言いたいですね。その心というたからものは、奪われることもなく、盗まれることもない。また落としてなくしてしまうようなものでもない。そういう意味のたからもの、それこそすばらしいたからもの。

もっと言うならば、

「君の心が君にとってすばらしいたからだということは、君のやってきたことをずっと見ていると、わにのおじいさんに対するやさしい心遣い、丁寧な言葉遣い、すべて君の人柄・心・行い・すべてがすばらしい。そのすばらしさが、君にとっての大事なかけがえのないたからものと言っていいんじゃないか」

とこういうふうに例えれば言ってやりたい。こういうことを目指す授業をやってみたいと思います。

その前にみなさんやってみて下さい。どういうことになるか。

この教材での生きる力

こういうことをこの教材で学ぶ。にんげんにとって何が価値か、何が素晴らしいか学ぶということは、そういうことを求めて生きていこうということにもなってくる。つまり、生き方に関わってくるわけです。

おにの子じゃないけれど、未知のもの、すばらしいもの、それを見たくて、山を越え野を越え、川を渡っていくという勇氣も力もついてくるわけです。力というのはそこから出てくるのです。

「ずるい きつねと かしこい 子ガモ」

作者

この作品はロシアの作家でビアンキという方が書きました。この方は生物の学者でもありますし、作家としても著名な方です。世界的に知られている作家です。小さい子どものための絵本なんかもたくさん書いておられます。

これから取り上げる作品も、子どものために書かれたものなんです。学者であるだけに書かれている事柄が、実際の鳥やけものたちの生態を、きちんとリアルに踏まえて書かれています。もちろん擬人化・人物化されていますから、現実の鳥やけものとはちがうわけですけど、そのことの背後には、ちゃんとした科学的根拠があって書かれています。そういう点では大変ユニークな作家と言っていると思います。訳があまりうまくない所もあるんですが、がまんして聞いて下さい。

△ あきです。ずるい きつねは かんがえます。▽

と語り手が語っています。この語り手がずるいきつねに寄り添って語っています。

△「かもたちが たびじたくを はじめたぞ。どうれ、川へ でかけて、子ガモを つかまえて やろう。」▽

△たびじたく▽っていうのはいよいよ冬が近づいてくることです。そうすると川や湖が凍るわけです。凍ると魚は捕れませんし、第一、大変危険です。水鳥というのは水の上に浮かんでいるから、きつねなんかにおそわれないという安全があるわけですが、氷が張ってしまうと、きつねにおそわれる、えさが捕れない。そこで舞台はシベリアですけれども、シベリアのかもたちが日本列島へ渡ってくる。秋になるとかもが渡ってきますね。そして冬の間日本で過ごして、シベリアの雪解けが始まると、またシベリアへ帰っていく、というようになります。そういった鳥の渡りということが、前提となっている話です。

旅に出る前は、かもたちは栄養をいっぱいつけて旅に備えます。それから羽のつくろいをしたり、支度をするわけです。きつねは、そういったことをよく知っていて、もちろん人物化されていますから、きつねの考えていることを、語り手が語るわけです。

なぜ子がもを捕るのかというと、大人のかもはもう経験がありますから、いつ何時、きつねがおそってくるかも知れない。だから安全な、しかも気がついたらパツと逃げられるところにいる。しかし子がもというのは経験がないので、そこらの適当なところでやってみる。きつねが近づいてきてもわからない、見えない、結局子がもが犠牲になる、そういうことがある。というのは、そういう実態をよく知っていて、それをもとに書いてあるわけです。

△ やぶの かげから、こっそり のぞくと、なるほど、かもの むれが そろって、きしに あつまって います。一わの 子がもが、すぐ そのの やぶの 下に たって、足で はねを そうじて います。

きつねは 子がもの はねを ぱっくり！

あるったけの ちからを だして、子がもは にげて しまいました。きつねの 口には はねが のこりました。

「ちえっ、こいつめ！・・・」
と、きつねは かんがえます。

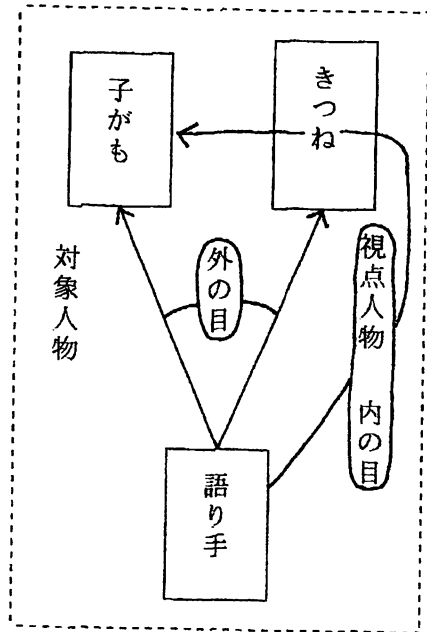
「うまく にげやがった・・・」

かもの むれは、いっせいに はばたくと、とび上がって にげてしまいました。▽

視点人物・対象人物

きつねという主語がありませんね。語り手がきつねの目と心に寄り添って語っている。この場合、きつねを視点人物、見られている方の子がもを対象人物と名付けています。

語り手が、きつねから子がもを見て、きつねの気持ちになって語っている。こういう語り方をしています。まずここを押さえておきましょう。(板書)



△なるほど▽というのは、語り手がきつねの気持ちになって語っているんです。△やぶの下に立って▽いるというのはどうかということかと、やぶがあると、子がもの方からきつねが来るのが見えない。やぶのかけからきつねが来る、語り手はきつねの側から見て語っている。△のぞくと▽やぶのかけに子がもがいている。

子がもの方から見ると、ここは危ないところなんです。なぜかというところ、こちらからきつねが忍んで来ても見えない。きつねの方から言うと、身を隠しながら近づくことができ。それが、やぶというものの意味なんです。

その△やぶの下▽というところに、線を引いておいて下さい。このあと二回出て来ると。それをあとで問題にしたいと思います。ここでは、このやぶの下に子がもがいているということが、非常に危険な所にいるというイメージを持って下さい。

ようやく、かもは逃げたわけです。語り手はきつねの目と心に寄り添って語っていますから、きつねの気持ちはそこへ具体的に出てくるわけです。でも、きつねから見た、子がもの様子は語られているけれど、子がもの気持ちは出てこない。こういう関係になっています。

△ だが、あの 子がもは、とりのこされて しまいました。

—— つばさは きずつき、はねを むしられて しまった からです。

子がもは きしから なるだけ はなれて、あしの かけに かくれました。

きつねは どうすることも できず、どこかへ 行って しまいました。▽

水の中にはきつねは入れませんから、安全な所へ逃げたわけです。

△ ふゆです。ずるい きつねは かんがえます。

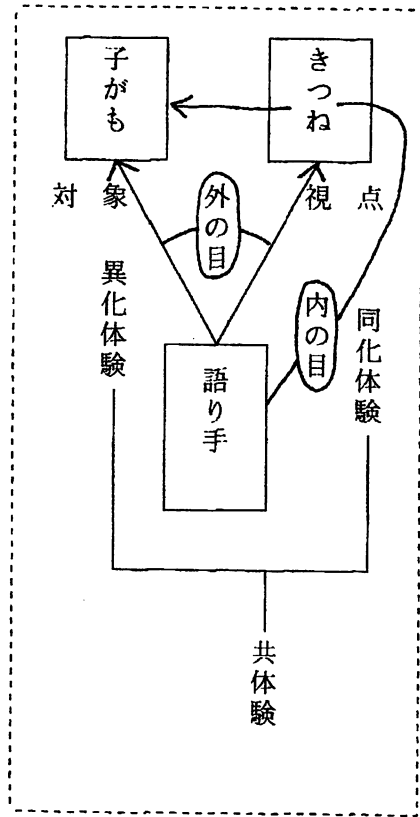
「みずうみが こえりついたぞ。いまこそ 子がもは わたしのもの。どこへも わたしから にげかくれは できないよ。ゆきの上は どこへ いくとうと 足あとが なく。その 足あとを つけて行って、みつけてやるさ。」▽

もうほかのかもは、日本列島の方に渡ってしまいます。子がもは羽を傷つけられたので、すから、もう飛べないわけです。だから渡りができずに、一羽だけのこったわけです。すると歩いていくしかない。歩いていくと雪の上に足あとがつく。どこにげようと、どこへかくれようと、足あとをたどっていけば必ずかもに行き着く。だからその足あとをつけていく。さすがにきつねですね、かしこいですね、ずるがしこいといいますが。

△ 川へ やって きました。なるほど、水かきの ついた 足あとが、きしの ゆきの 上について いました。ところで、あの 子がもは、やぶの 下に すわって、からだを まるく ふくらませていました。▽

読者の体験

読者は読みながらイメージを描いていきますが、イメージを描くと、どういうふうな気持ちになるか。「この子がおも、前も危険なやぶの下にいた。そこでもう少しで死んでしまふところだった。あんな目に遭いながら、これにこりずに何でまた、やぶの下にいるんだ。」と、こういう腹立たしい気持ちになりますね。(板書)



語り手がきつねに寄り添って語ります。読者も語り手と一緒に子がもの様子を見ます。外の目で読者も見ます。そうすると、またこの危険なやぶの下にいるというのはなんてばかなやつか。どうしてこりないのだ、という腹立たしさが浮かんでくる。これが、読者が外の目で子がもの様子を見て体験すること、これを外の目で見て異化する

異化体験と言います。この場合の異化体験とは、子がものを見て腹立たしく思う体験です。きつねの気持ちになって読んでいくと、ここはきつねと同化する同化体験をします。きつねが今いろいろなことを言っていますが、きつねの考えていることは、手に取るようにわかります。きつねの気持ちを読者にもわかる、これをきつねと同化体験と言います。しかし、きつねじゃありませんから、きつねと同化体験すると同時に異化体験もする。外の目できつねを異化して見ていますから、ずるいきつねだなあ、悪いことを考えてる。なるほどさすが、やっぱりするいきつねだけのことはあるわい、と見ているわけです。

読者も外の目で子がものを見るし、きつねも見ている。同時にこの作品の場合には、語り手がきつねに寄り添っていますから、読者もきつねの気持ちに寄り添っている。きつねが見たり聞いたり思ったように、読者も見たり感じたりということをする体験。

この二重の体験をすることを共同体験と言っています。

△ そこは いずみが じめんの なかから わき上がった、こおりの はる ひまが
 ないので。—— あたたい こおりの あなが あって、そこから ゆげが
 たって います。▽

北海道なんかでも、冬になると川が凍ります。それでも地下水が汲み上げられている所は、だいたい四〇五度あるそうです。そこだけ凍らない。そういう凍らない所の上に、水鳥が浮かんでいる。まわりから身を守ることができるといふことでもあり、水が吹き出して温かい。

△ きつねは、子がもに とびかかりました。だが、子がもはすりぬけて、どぶん！そして、こおりの 下へ、にげてしまいました。▽①

ここに穴があって、きつねが氷の穴に飛び込んだら、これはもう水の中で息ができません。その下に①と書いておいてください。

△「ちえっ、こいつめ！・・・」

と、きつねは かんがえます。

「おぼれて しまったじゃないか・・・」

きつねは、どうすることも できず いった しまいました。▽②

この下に②としておいて下さい。

△ はるです。ずるい きつねは、かんがえます。

「川の こおりが とけて いる。でかけて いった、こおりついた 子がもを ごちそうに ならうか。」▽

雪解けが始まります。川の氷も溶けだします。そうすると、その下に窒息して死んでいて、氷り漬けになってあの子がもが出てくる。それを食べてやろうと言っているわけです。読者は「いったいどうなってるんだ、この子がも、氷の下へ逃げていったが、そのままだと当然窒息する。でもなんか死んだとは思いたくないし。生きててくれればいいが。」でも、生きているということはおよそ考えられない。これは仕掛けですね。

やぶの下の謎

△ やってきますと、子がもは やぶの 下を およいで います。—— 生きて
びんびんして いたのです。▽

「えー、どうして？」と思えますね。驚く。そこで語り手が説明をそこにに入れる。これから言う二行は①として下さい。さっきの①に入る所です。

① 子がもは あのととき、こおりの 下を くぐって むこうぎしの こおりの あなへ いったのです ———— そこにも、やはり、いずみが わいて いたのです。V

あのととき、穴をくぐって、別な穴から出ていたんですね。

なぜきつねに見えなかったかと言うと、やぶがあったために、やぶのかけになって、別な所に逃げたということがわからなかった。きつねから見えない方角の穴を、あらかじめ選んでいた。

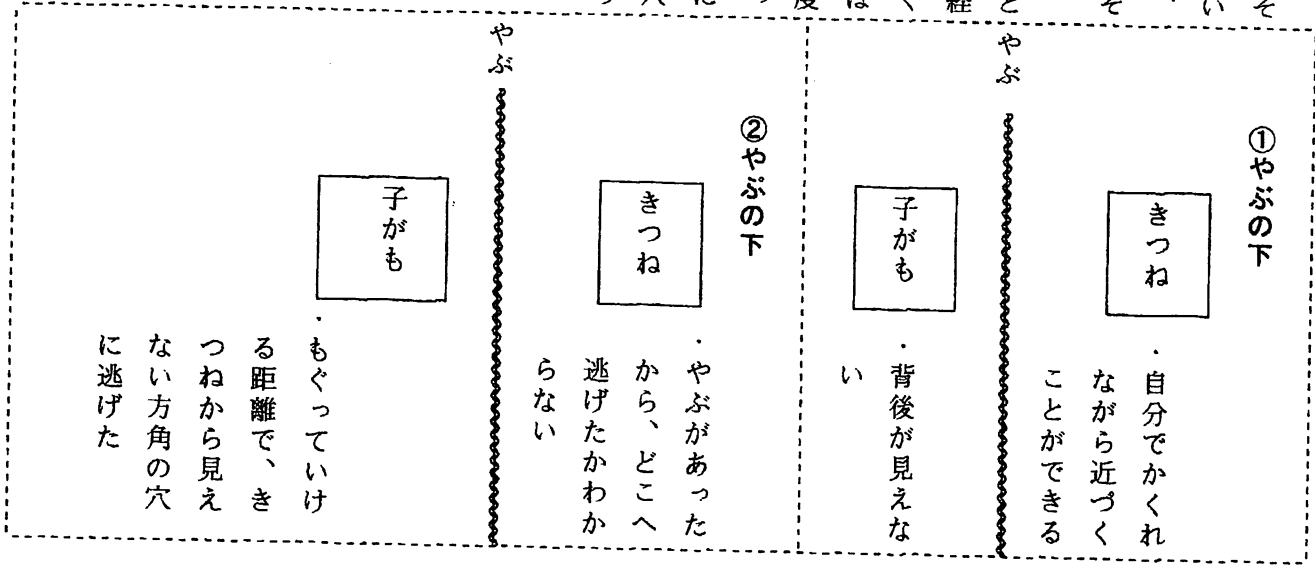
だいたい氷の下をもぐっていくためには、そんなに遠くに行けません。途中で死んでしまいます。やはり氷の下をもぐって行けるきより、しかもきつねの方からやぶで見えない方角、そこを選んでいたんだということがわかります。

最初、私たちはへやぶの下にたっていたVときは、あの危ないやぶの下にまたいる、あの経験はどうして学ばなかったのか、と腹立たしく思いました。なんとおろかなと思っただが、実は逆にかしい子がもなんだなあ、ちゃんと今度は自分の経験したことを生かして、自分にとってマイナスであったこのやぶを、逆にプラスに生かす。逆にきつねの方から見えない方角の穴を探して、そこから逃げるというふうに、あらかじめシュミレーションしていたんですね。一度くらいくぐってみたかも知れませんか。(笑)

文の順序

そうすると、あーっというふうに、ある感動が起きますね。最初に飛び込んだときに、へ氷の下に逃げてしまいました。Vのあとに、この①の説明を入れてしまうと、今言ったような感動が出てこないんです。ここで、なんとおろかなやつだ、と思わせておいて、それをどんでん返しを食わせて、実はほんとかしい子がもだったんだ、と驚きを読者に体験させる。

文芸の世界というのは、頭でわかるだけではなく、ハートに訴える、感情に訴える、そしてある驚き・ある感動をもって、それだけのかしこさというのを体験させるといふこと



なのです。

そもそもこの物語は、語り手がきつねに寄り添って語っていますから、きつねの目から見ると、そこでは見えないわけです。くぐって向こうへ逃げたということが。要するに、そういう順序で語るのが当然であり、当たり前なのです。きつねから見えない、だから読者にも見えない、最後の所に来て語り手が、実はあのとき、と説明をささむわけです。

△ こうして、ふゆじゅう、くらしていたのです。

「ちえっ、こいつめ！……」

と、きつねは かんがえます。

「まってる、いま、水に とびこんで つかまえてやる……」

「だめ、だめ、だめ。」

と、子かものは なき はじめました。

水から さっと できると、とんで いった しまいました。▽

また読者にとっては驚きです。羽の傷ついたかまがどうやって逃げたのか。そこでまた、語り手が説明を入れる。

△ ふゆの あいだに、子かものは つばさの きすが なおって、あたらしいはねが、はえて いたのです。▽

あ、そういうことか、と納得する所なのです。

子かものかしこさ

ここでもおもしろい問題があります。

題名が「ずるいきつねとかしこい子かも」となっていますが、かしこいということは、題のあと、どこにも出てこない。でも読者は最後まで読むと、かしこいな、というふうに思われると思うんです。じゃあ子かものかしこさとは、どういうことをかしこいといっているのか。

少しとなりの人とおしゃべりをして考えてみてください。

(話し合い)

発表者① 子がおもが自分の置かれている状況ってものをすっかりとわかってた。飛べないっていう状況と、飛ぶとおそわれるという状況を、子がおもがすっかりとわかってたということ。やぶの下にかくれていたということは、本来であれば、きつねから見ればいい条件であると思うんですが、そのやぶの下に居ることを逆に子がおもも利用して、自分を守ることができたということが、かしこいんじゃないかと思えます。

なるほど、かしこいお答えでしたね。(笑)もう一人くらい。

発表者② 一度危ない目にあつたので、やぶの下は危ないとわかってるのに、それを逆手にとり、きつねにはねらいやすい場所と思わせておいて、逆に二度とねらえなくしたところがかしこいと思います。

答えにいろいろ付け加えながらお話ししましょう。

この子がおもは最初、やぶの下にいたことで危ない目に遭つたのです。なぜかというところ、自分からはおもそってくるきつねが見えない。相手の方からはそこに身をかくして、忍び寄ってくる。子がおもにとっては最も危ない場所です。

でも子がおもは、まだ生まれて日が浅い。経験の浅いことからくる失敗だったわけです。これはいたしかたない。人間は、知らないことから失敗を冒すということはあります。それは責められませんよね。幼い子どもは経験や知識がないためにいろいろな失敗をします。これはある意味仕方ないことです。しかし一度その経験をして失敗した。その失敗から学ぶということが必要です。二度と同じ失敗を繰り返さないことが、本来はかしこいと言えるのです。失敗を冒さないことがかしこいのではなく、二度と失敗を繰り返さないというのが、本当の意味で、かしこいということであると思えます。

ところが二回目に、またやぶの下に居る。読者から見ると、なんと愚かな子がおも、ということになるわけです。失敗を学んだはずなのに、生かしてない。要するに愚かという感じですね。

しかし、それは読者には事実が分かっているからです。分かっていたのは、語り手がきつねに寄り添って語っていますから、きつねの目から見たことしか、読者にも見えない。きつねから見た目というのは、やぶの向こうの見えないところへ、子がおもが逃げに行ったということが、きつねからは見えない。つまり読者からも見えない。だから、なんと愚かなことかと誤解したわけですが、後になって語り手から説明を受けて、「そうか、本当はかしこい子がおもだったんだ」と。

二重のかしこさ

では、どうしてかしこいのかというと、自分の失敗の経験を学んだということが一つあります。もう一つ、「逆手にとって」という言い方がありました。ここが非常におもしろい所ですけれども、自分が失敗したことは、やぶのために向こうが見えなかったということ。これは失敗でした。でも今度はそれを逆手にとって、きつねは二度目におそうときも、やっぱりやぶの方から身を潜めてやって来たと思いますよ。そこで子がもの方から言うと、自分が飛び込んでこっちに行っても、きつねの方からは見えない、そういうふうによぶを利用した。逆にやぶを利用したわけですね。

自分の失敗したことを生かして、それを逆手にとって、自分の行動をやぶで隠すというふうにやったわけです。ここが二重にかしこい。

普通だったら、やぶの下は危ない、だからやぶの下を避ける、という所です。しかしやぶのない所とは見通しのいい所ですから、どこからでも見える。危険ですよ。なぜかという飛べないわけですから。

そこでいろいろ考えたと思うですよ、子がも。そうして最後の結論が、やぶの下。そしてきつねをそこへ導いて、きつねの方から自分が見えないと言う形を作りだした。本当によく考えていると思います。

失敗を繰り返さないように考えたということ、しかも、やぶの下ということ逆手にとって自分がした失敗を今度は相手にさせる。なかなかやるじゃないですか。そういうところが二重にかしこいことになる。

この教材での生きる力

子がもにとって生きる力というのは何かというと、厳しい自然の状況というのがあります。いつも天敵にねらわれ、おそわれるというそういう世界です。そういう厳しい世界の中で生きると言うことは、生きがたい、難しい状況であるわけです。その中で知恵を働かせると言うことは、やぶとは何か、自分ときつねとの関係、氷の穴と穴の距離、いろんなことを判断して、そしてその上で、ある自分の行動を決定する。これは、ものの方・考え方をフルに動員して、これからの自分の行動を設計するわけです。こうきたら、こうする、ということをしちんと設計する。そのことによって、生きることができたのです。

ですから生きる力とは、生きることができるといふことです。子がもが生き延びられた・みごとに生きたということ、つまりいろいろな見方・考え方を組み合わせて、設計して、みごとに生き延びたわけです。結局そういう状況の中で、生きられる力ということですね。

人間も同じです。いろいろな状況の中で、みごとにりっぱに生きていくためには、いかにあるべきかということ、結局設計しなくちゃいかん。いろいろな見方・考え方を駆使し

て。そのためには、それを学ばなくちゃいけない。子がもは学校で学んだのではなくて、命がけの経験から、現実から学んだわけです。

ただ、人間の子どもは、現実から危険な目に遭わせて学ぶということじゃなくて、いろんなモデルを使って、教材を使って、先生の指導のもとに、いろいろなことを学ぶ。その学んだことが、生きる力になってくるわけです。

かしこいとは、そういうことを学んで、それを見事に自分の行動に行かすことができること。それが生きる力だと思います。

物語の筋

もう一つ、大事な問題があります。

みなさん、物語には筋がある、話の筋・物語の筋、ということをおっしゃいますね。物語の筋というのは、いわゆるいろんな読解指導の理論があります。それぞれおっしゃってる研究者の方によって、ニュアンスの違いはありますが、全部共通して言えることは、読解理論では、皆さんが子どもの頃習ってきたこと、現在また皆さんが子どもに教えていることです。

そこで、筋というのはどういうふう理解されているかということ、できごとの筋・事柄の筋・時間の経時的展開、これが筋だと習ってきて、また教えていると思うんです。私、西郷文芸学においては、事件の筋を追っていくことではない。では何を辿っていくか。

西郷文芸学の筋

何を辿っていくかということ、イメージをずっと作って、ずっと辿っていく。そしてそのイメージを辿っていくということは、同時にある体験をそこですることになる。体験していったことは、そこである意味づけがされていく。そのイメージ体験・意味の形作られていく過程・プロセス、これが筋というものなんだ、と定義しています。

「ずるい きつねと かしこい 子がも」の筋

じゃあこの作品で、私の言う筋とはどういうことか、読解理論で言う筋とはどういうことか。

読解理論での筋は、経時的展開になっていないといけない。この物語は経時的展開になっていない。①とした所には説明の①が入らなきゃいけない。時間の順序でいくとそうです。というふうに、筋というものを事件の後を追っかけていくと考えている。

時間の順序に従えば、経時的展開、時間が行きつ戻りつすれば、錯時的展開と言っている。こういう理論が打ち出されてきた。日本というところは、外国から何か入ると、それを輸入して翻訳して、それをまねするということが、明治以後やられてきた。

無責任に「生きる力」なんてかっこいい言葉で言ってますけど、生きる力とは何か、結局それは生き方を教えること、学ぶことだと、一言も言っていない。ほんと無責任かと思えます。人間が生きるということは、社会の中でりっぱな一人前の人間として生きると言うこと。生きるためにはどうしたら良いのかというと、いろんなものの見方・考え方を身につけていかなきゃならない。それが教育ということだと思います。

文芸学は人間学

今日お話したことは国語の物語についてですが、皆さんも少しでも文芸理論を学んで下さい。そしてその文芸の理論は、それを学ぶということがそのまま、生きる力につながる。学ぶというのは、単に文芸をわかるための理論ではなく、学んだことが即、人間の生き方をわかる、そういう理論なんです。

文芸とは人間を描いたもの。その文芸がわかる理論はそのまま人間をわかることにつながる。それは人間学です。

質疑応答

Q 「かぼちゃのつるが」を指導主事訪問のときに集中授業でやっただけです。そのとき、人間の生き方と結びつけてやっただけですが、指導主事の先生からは、この原田直友さんとこの人は、そういうふうと考えて作ったのではなくて、かぼちゃが伸びていく様子に感動して作った詩ではないか、私ならそういうふう素直に授業しますけれども、とおっしゃっていたんです。教材で教えるか、教材を教えるかの違いじゃないかと思っただけです。教材で教えるか、教材を教えるかの違いじゃないかと思っただけです。教材で教えるか、教材を教えるかの違いじゃないかと思っただけです。教材で教えるか、教材を教えるかの違いじゃないかと思っただけです。

これは読めば感動するんですね。まずね。(笑)だからそれはその通りで、感動するということが出発点。出発点であって、到達点ではない。

読んで感動するということがベースになります。かぼちゃのつるの、エネルギーな、人間で言うと若者の、見事で生き生きとした姿ですよね。その姿をイメージする、僕はイメージ化と言っています。かぼちゃのイメージをとらえる、その姿に感動する。それで終わってもそれなりの意味はありますけれど、せっかいですから、そこからもう一つつっこんだ、そこを今言っているわけです。

その場合に、作者の意図というものがありません。非常に重要な問題です。作品というのは作者がいて書くわけです。そのときに作者は意味づけをして書くわけです。これは作者の意図・あるねらいと言っておきましょう。意味づけでもいいんですが。

それを読者が読むというときには、これまでの国語教育の歴史では、作者の意図を読む

ということが目的だった。どういうことかというのと、教師が子どもにこういうのですね。作者は何を言いたかったのだろうか、何を書きたかったのだろうか、それを考えてみましょう。と。そういう授業をしてきました。戦前戦後からずっとやられてきた。それは作者の意図に迫るとか、意図をとらえるとかということ。読者が読むことを解釈と言いますが、それは読者の意味づけということですよ。だからこの作者の意図と、読者の解釈の問題である。結論を言いますと、読者の側から言うと、わからないのです、聞かなくては。もちろん、作者はこの世にいない方もいますよね。ですから、聞けない。

で、聞くと大抵怒ります。例えば、中野重治さんがある席上で、こう話しておられます。ある中学校の先生が、中野さんの詩の授業をしたんです。それを中野さんも見に来られた。せっかく作者がおられるので、作者はどういう意図で書かれたんでしょうか、と聞いた。そしたら中野さんが、かんかんに怒って、「そういうことは失礼だ。なぜかというのと、作者はなるほど、ある意図を持って書いているが、一度作者から離れた作品は、それはもう読者のものである。読者がどう解釈するかでいいんだ。作者の意図と一致しようと一致しまいと、それは問わない。作者の意図を越えて、読者が深い、豊かな読みをすることがいくらでもある。そのことが作者にとってはありがたいことだ。作者の意図に合うように合うようにというのは、失礼だ。自分の思うとおり、とことん深く読んで下さい。」というようなことを言われたことがあります。

私はまったく賛成です。ゲートという詩人の言葉に「作品を最も良く理解しているのは、作者よりも読者であることが多い。」とあります。小説の神様と言われた志賀直哉。「暗夜行路」についてある評論家が、これは一つの恋愛小説である、と評論した。それを聞いた志賀直哉が、「これが恋愛小説だと読めるということは、作者にとっては大変ありがたいことである。」と書いている。

木下順二さんがやっぱり怒ったことありますよ。「夕鶴」について子どもたちや先生たちが、いちいちこれは何の意図で、と聞いてくる。そしたら私に、私は悪意なものですから、「西郷さん、あなた学校の先生に指導しているんだから、言ってくれ、いちいち私に聞かれても困る、自分たちで考えろと言ってくれ。」と怒っていたことがあります。(笑)そうですね。意地悪で言っているんじゃない、作者の手を離れたものはある意味、読者のものだ。煮て食おうと焼いて食おうと、おいしく料理して食ってくれ、ということ。要するに、豊かに深く読めばいいわけです。作者の意図と合うとか合わないとかは、あまり考える必要がない。これは読者が主体的に作品を読むことで、読者論とか読者需要論とか言いますが、これが強調されている時代です。中には「作者の死」と言う人もいます。

戦後の今や、作者の意図がどうか言う人は、専門家の中にはほとんどいない。第一わかりっこない。私もわかりません。聞いたことがない、聞く必要がない。豊かに読む・深く読む、それを聞いた人がなるほどと思わなかったら、自分の読みがまずかったと反省すればいいわけです。こじつけだったかなと。みんなが納得できるような読み方をすればいい。

あえて言うとは、作者はかぼちゃのつるのことを言いたくないんじゃないですよ。それに託して人間のことを言いたくないんですよ。かぼちゃのつるが伸びる話をして、それが何になる。(笑) どうってことないですよ。たとえば。かぼちゃに託して、生き方をつまりは描いているんです。

(終わり)